

北シリア新石器時代における土器装飾の変遷 —ルージュ盆地とバリフ川流域を例に—

小高敬寛

Changes of Pottery Decoration in Neolithic Northern Syria:
A Comparative Study of the Rouj Basin and the Balikh Valley

Takahiro ODAKA

キーワード：新石器時代土器、土器装飾、ルージュ盆地、バリフ川流域、相対編年

Key-words: Neolithic pottery, pottery decorations, Rouj basin, Balikh valley, relative chronology

はじめに

紀元前7千年紀¹⁾、近東では土器の利用が普及しはじめ、これを指標として時代は先土器新石器時代から土器新石器時代へと移る。土器新石器時代の研究は、古くから先史時代調査が盛んな北メソポタミア地域を中心に進められてきた。特に、近年はダム建設に伴う緊急調査などで、シリア北部やトルコ南東部において組織的で活発な調査研究が行なわれている。

いっぽう、北レヴァント地域はいわゆる「肥沃な三日月地帯」の只中に位置しながら、土器新石器時代研究において主導的な役割を果たしてこなかった。しかし、土器使用の普及において、この地は最初期に位置づけられるような技術的先進性をもち、かつ、先土器新石器時代B期の大きな特徴の一つである10haを優に超えるような大規模集落が引き続き存在していた(cf. Le Mièvre and Picon 1998; 常木 1995)。この二つの特徴を併せもつ地域は近東でも非常に稀であり、他にチャタルホユック(Catalhöyük)を擁する中央アナトリアが見出せるくらいである²⁾。おそらくは大規模集落を支える社会経済的な仕組みを維持しながら、いち早く土器新石器時代という新たな局面に突入したのだろう。無論、土器製作という一つの技術が当時の社会に与えた影響を必要以上に誇大視してはならない。しかし、土器新石器時代に入ると、たとえば各地で一様に集落規模が縮小していくなど、漸進的な変化の傾向が看取できることも事実であり、北レヴァント地域がその過程を考えていくための好例であることは間違いない。

この地域の土器新石器時代研究は、長らくシカゴ大学によるアムーク平原の調査成果に支えられてきた。とりわけ、1960年刊行の報告(Braidwood and Braidwood 1960)において提唱されたいわゆるアムーク編年は、北レヴァント先史時代の編年枠組みとして現在にいたるまで利用され続けている。ただし、この調査自体は1930年代に実施され

たもので、その後ラス・シャムラ(Ras Shamra)やテル・スーカス(Tell Sukas)、クミナス(Qminas)など小規模な新石器時代調査は時折なされてきたが(Contenson 1992; Riis and Thrane 1974; Masuda and Sha'ath 1983)、全体として調査例に乏しく新たな資料が手薄であることは否めない。つまり、アムーク編年が長きにわたって確固たる地位を占めるに値する傑出した研究成果であることは確かだが、いっぽうでこれを検証したり補強したりする機会に恵まれてこなかったのもまた事実なのである。

近年、ようやくそういった動きがみられてきた。1990年から1992年にかけて実施された筑波大学によるルージュ盆地の一般調査は、アムーク編年に再考をせまる新たな編年観を提示するに至っている(常木 1993; Iwasaki et al. 1995: 146-152; 三宅 1997)。また、同大学は1997年からシリア古物博物館総局と合同で同盆地内最大の新石器時代遺跡、テル・エル・ケルク(Tell el-Kerkh)の本格的な発掘を開始し、これまでに大量の資料を得ている(Tsuneki et al. 1997, 1998, 1999, 2000)。現在、これらは整理・分析中であり最終報告は未刊だが、質・量ともに新たな北レヴァント新石器時代の中心的資料として期待できる。

このように北レヴァント地域の土器新石器時代研究は状況が好転しつつあるが、そこで重要なのは、その文化の適切な位置づけである。先に述べたような北レヴァント地域がもつ特殊な状況は、先土器新石器時代から土器新石器時代へという近東全域にわたる文化的な変遷の解明において、巨視的に活かしていく必要があろう。そのためには周辺地域の諸文化との比較などを通し、北レヴァント地域の果たした役割を明確にしていかなければならぬ。幸いにして、土器新石器時代の調査研究が活発な北メソポタミア、特に近年めざましい成果をあげつつあるシリア北部やトルコ南東部は恰好の比較資料になる。

本稿ではその実践的試みの一つとして、北レヴァント地

域のルージュ盆地と、北メソポタミア地域において集約的な調査が行なわれているバリフ川流域を採り上げて考える(図1)。それぞれの出土土器を装飾に重点を置きながら比較し、関係性を検討してみたい。土器の装飾を対象としたのは、資料として量的に恵まれており、既刊報告などの文献からも比較的検証しやすく、さらに編年の基軸として有効であると考えたためである。また、ここで扱う土器の「装飾」とは、器面に何らかの物質(粘土や顔料など)を付加したり、逆に胎土を減じさせたりといった器面に対する加工のなかで、視覚的な効果を併せもつものを指す。したがって、厳密な意味で「装飾」という語を用いるのは不適切かもしれないが、他によりよい表現を想起できなかったのでご容赦願いたい。

本稿で行なう議論は非常に限られた範囲ではあるが、今後の比較研究の基盤づくりに多少なりとも寄与することができれば幸いである。

北レヴァント地域における土器の変遷—ルージュ盆地の例—

ルージュ盆地はシリア北西部、シリア第二の都市アレッポの南西約70kmに位置する。南北の長さ約37km、東西の幅2~7kmの規模をもつ南北に細長い小盆地で、盆地内の標高は210~250mほどである。先述した筑波大学による一般調査にともない、テル・アレイ(Tell Aray)1号丘および2号丘、テル・エル・ケルク2号丘、テル・アブド・エル・アジズ(Tell Abd el-Aziz)の4遺跡で試掘調査が行なわれ、これらの成果、特に出土土器にもとづいてエル・ルージュ編年が提唱された(岩崎・西野編1991, 1992, 1993)。その土器の変遷はすでに三宅(1997)によって詳述されているが、現在まで発掘が続いているテル・エル・ケルクを構成する一遺丘、テル・AIN・エル・ケルク(Tell Ain el-Kerkh)からの出土資料は、この編年観を補強し、細密化するうえで多くの情報を有している(Tsuneki et al. 1997, 1998, 1999, 2000)。そこで、ここではテル・AIN・エル・ケルクでの成果を含めて、土器新石器時代にあたるエル・ルージュ2期の土器の変遷を装飾に注目しながら簡単にふれておきたい。

エル・ルージュ2期は2a、2b、2c、2dの4期に細分される。北レヴァント地域で最古と考えられている土器アセンブリッジはテル・エル・ケルク2号丘6~5層で確認されたエル・ルージュ2a期のものであり、暗色磨研土器(Dark-faced Burnished Ware; 図2-3~6, 8~10)とその祖型とされるケルク土器(Kerkh Ware; 図2-1, 2)、そしてわずかな粗製土器(Coarse Ware; 図2-7)から構成される。装飾については層位ごとに変移がみられる。6層では粗製土器に赤色ウォッシュが施される例が2点だけ認め

られるものの、基本的に出土土器はすべて無文である。しかし、5層では爪形文や刺突文をもつ暗色磨研土器(図2-3, 4, 8~10)が登場し、わずかではあるが暗色磨研土器同様の胎土に白色プラスターを塗布した土器も現われる。

次のエル・ルージュ2b期の土器アセンブリッジは、テル・アレイ2号丘11~5層³⁾、テル・エル・ケルク2号丘4~1層および隣接するテル・AIN・エル・ケルク北西区2~1層で検出されている。暗色磨研土器を主体として粗製土器が伴うが、ケルク土器は減少し、やがて完全に消滅してしまう。わずかながらケルク土器が共伴するテル・エル・ケルク2号丘4~3層とテル・AIN・エル・ケルク北西区2~1層を2b期の前葉、共伴しないテル・アレイ2号丘11~5層とテル・エル・ケルク2号丘2~1層を2b期の後葉、と細分することができるかもしれない(cf. Tsuneki et al. 1998: 12-14)。また、粗製土器の割合も後者ではかなり増えている。暗色磨研土器の装飾は爪形文や刺突文(図2-11, 12, 16~19)のほか、櫛歯文のような文様(図2-14, 20)、あるいはユビで粘土を押しつぶし摘み上げたような装飾(図2-13, 15)などの押捺系の装飾が主体的で、加えて粘土帯を用いて突帯を形づくる貼付文⁴⁾がみられる。装飾というわけではないが、耳状粘土の貼付による把手(図2-17)もこの時期に登場する。また、粗製土器にも装飾をもつものが現われ、爪形文や刻文、贴付文(図2-21)を施したもののがみられる。他にテル・アレイ2号丘8層では、暗色磨研土器と同様の胎土をもち、器面に白色プラスターを塗布したうえで彩文を施した土器片がみられる。最後の例外を除けば、この時期の土器装飾は総じて押捺や贴付といった立体的な構成が特徴といえるだろう。

エル・ルージュ2c期はテル・アレイ2号丘4~1層、テル・AIN・エル・ケルク中央区下~中層⁵⁾で確認されている。この時期は出土土器から少なくとも三つの段階に細分できるが、土器アセンブリッジはいずれも主体となる暗色磨研土器と粗製土器で基本的に構成される(Tsuneki et al. 1998: 16)。この時期に共通する装飾の特徴は、装飾をもない無文の土器が多くを占め、装飾を有する土器が少ないと、その種類は増加することである。

最初の段階はテル・AIN・エル・ケルク中央区下層で検出されているが、いまだ発掘された規模は小さいので、今後の調査研究によって更にその内容を明らかにする必要があるだろう。暗色磨研土器の装飾は爪形文が減少し、口縁直下に限定して施される刺突文が顕著になる。押捺系の装飾はヴァリエーションが乏しくなるといってよい。いっぽう、贴付文は粘土帯を使ったものだけでなく、粘土紐や円盤状の粘土などを使った形象的なものも出現し多様になる。また、粗製土器の装飾には2b期と同じく、刺突文、刻

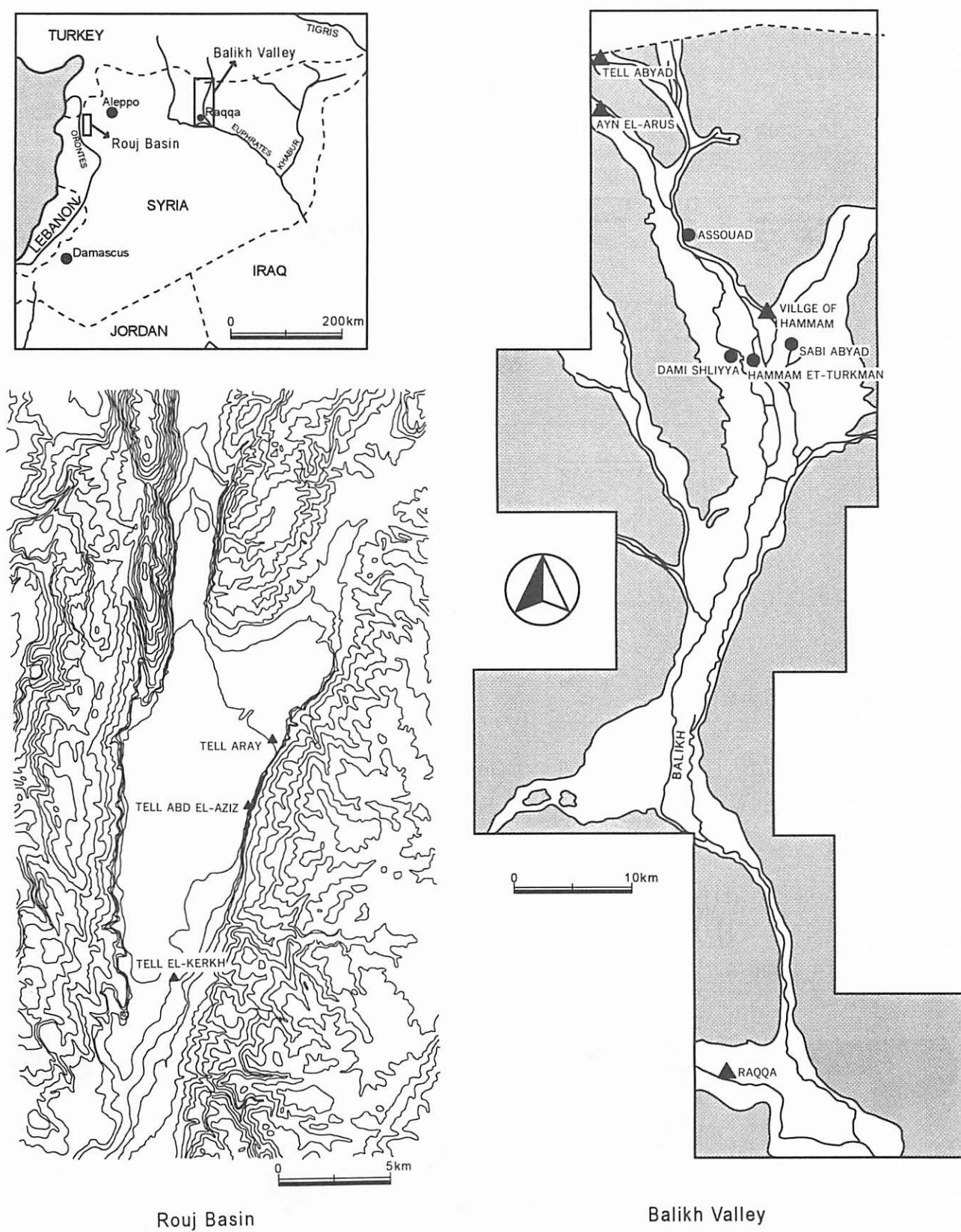


図1 ルージュ盆地およびバリフ川流域の位置
(岩崎・西野編 1992: Fig. 12; Akkermans 1993: Fig. 1.1. を改変)

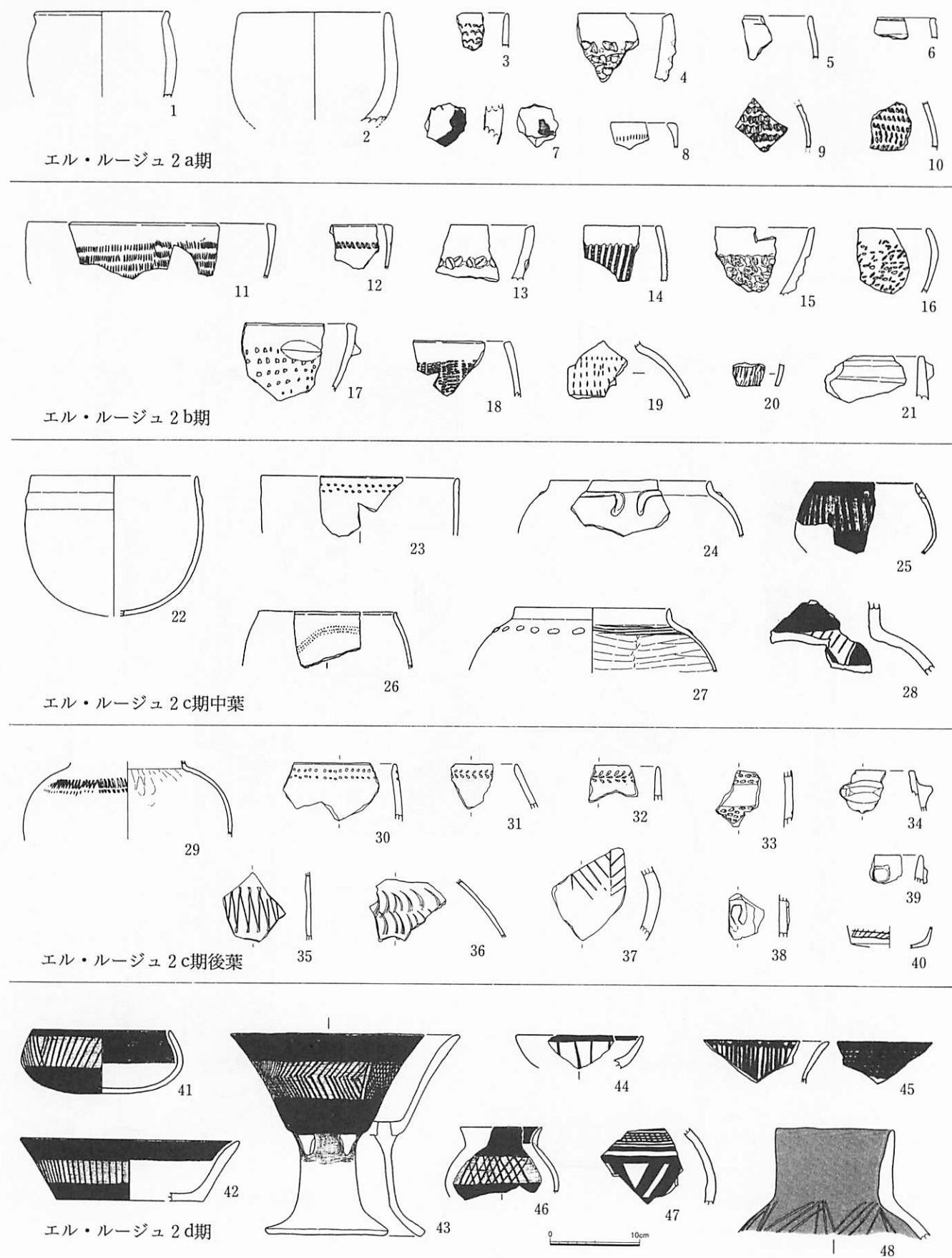


図2 エル・ルージュ2期の土器 (岩崎・西野編 1991; Tsuneki et al. 1997, 1998, 2000)
1~28、41~48 テル・AIN・エル・ケルク 29~40テル・アレイ2

文、貼付文がみられる。器面にプラスターを塗布した土器は、胎土が暗色磨研土器と同様なものに加えて粗製土器に類するものも現われ、両者とも赤色を主とした彩文の施される例がみられる。

次の段階はテル・AIN・エル・ケルク中央区中層、テル・アレイ 2号丘 4～3層で検出されている。暗色磨研土器の装飾は帯状に列点を配する刺突文がやや顯著になるが、貼付文、刺突文を基本とする構成は前段階から変化しない。しかし、この段階でわずかながら暗文(pattern burnishing)の施された例が知られている(図 2-25)。粗製土器にはいわゆるハスキング・トレイ(husking tray)が出現し、装飾にかんしてはこれまでのものに加えて彩文をもつものが現われる(図 2-28)。プラスターを塗布した土器はおおむね粗製土器に限られるようになり、暗色磨研土器のような胎土をもつものはほとんどみられない。また、テル・AIN・エル・ケルクでは、この段階において東方のサマッラ土器に類する精製彩文土器がごくわずか出土している⁶⁾。

エル・ルージュ 2c 期の最後の段階は、テル・アレイ 1号丘 25～22層および 2号丘 2～1層が想定されているが、前者は出土土器が少ないため明確ではなく、後者も調査規模が小さいため資料に乏しい。暗色磨研土器の装飾では貝殻腹縁文(rocker impressions; 図 2-29, 35, 36)が顯著で、他には刺突文(図 2-30～33)、貼付文(図 2-38)、刻文(図 2-40)、2例の暗文、そして新たに1例の彩文がみられる。粗製土器の装飾では、刻文(図 2-37)のみしかこれまでに知られていないが、前後の時期の装飾を考慮すれば資料不足の影響を考えた方がよさそうだ。プラスターを塗布した粗製土器も未見であるが、これも同様であろう。ハスキング・トレイは引き続き存在する。また、東方との関係を示すようなサマッラ土器やハラフ土器に類する精製彩文土器は、今のところみつかっていない。

エル・ルージュ 2d 期は 2 期の最後の時期にあたり、テル・AIN・エル・ケルク中央区上層、テル・アレイ 1号丘 21～18層、テル・アブド・エル・アジズ下層で資料が得られている。この時期になると土器アセンブリッジは大きく様変わりする。暗色磨研土器が主体で粗製土器が伴うという形は変わらないが、さらに暗色非磨研土器(Dark-faced Unburnished Ware)とクリーム土器(Cream Ware; 図 2-44)が新たに出現し、またハラフ土器に類する精製彩文土器(図 2-45, 47)も存在する。暗色磨研土器の装飾は暗文(図 2-41～43, 46)が圧倒的な割合を占めるようになり、他に刻文、刺突文、彩文がわずかに存在する。貼付文はすっかり影を潜め、装飾の立体的な構成は平面的な構成に取って代わられる。粗製土器の装飾は彩文と刻文(図 2-48)が多く、プラスターを塗布したうえで彩文を施したものも存在するが、刺突文や貼付文はほとんどみられ

ない。クリーム土器には彩文や暗文の施される例が多い。暗色非磨研土器は無文である。

以上、エル・ルージュ編年にのっとって北レヴァント新石器時代の土器装飾の変遷を追いかけてみた。大まかにいえば、装飾をもたない無文から押捺や贴付といった立体的な装飾が加わり、その後、彩文や暗文といった平面的な装飾に変化していくことが看取できる。

北メソポタミア地域の場合—バリフ川流域を例に—

バリフ川はシリア北部に位置する、ユーフラテス川中流にそそぐ支流の一つである。この河谷にともなう幅 1～12 km の氾濫原は、その両脇が急峻なテラスによって閉ざされているため、南北に細長い閉鎖空間を形成している。この流域は1970年代より集約的に調査がなされ、昨今の北シリア先史時代研究に大きく貢献している(e.g. Cauvin 1972; Copeland 1979; van Loon (ed.) 1988; Akkermans (ed.) 1989, 1996; Verhoeven and Akkermans (eds.) 2000)。その代表的な調査者である P. M. M. G. アッカーマン(Akkermans)は、おもにテル・アスワド(Tell Assouad)、テル・ダミシュリヤ(Tell Damishliyya)、テル・サビ・アビヤド(Tell Sabi Abyad) I号丘、テル・ハマム・エッ・トルクマン(Tell Hammam et-Turkman)からの出土資料を用い、先土器新石器時代から後期銅石器時代にまでいたるバリフ川流域の編年を設定した(Akkermans 1993)。現在のシリア北部で行なわれている調査研究は、このバリフ川流域での成果を比較材料にすえて議論している場合が多く、とりわけ土器新石器時代からハラフ期にかけてはその傾向が顯著である(e.g. Lyonnet (ed.) 2000; Suleiman and Nieuwenhuyse (eds.) 2002)。また、エル・ルージュ編年と同じように限定された小地域で組み立てられた編年があり、地理的にも北メソポタミアのなかでは西よりに位置しレヴァントに近いことから、ここではルージュ盆地と比較する材料としてバリフ川流域の事例を用いることにした。

バリフ編年で土器新石器時代の始まりに位置づけられているのはバリフ II A 期である。テル・アスワド VIII～VII 層、テル・ダミシュリヤ 3～7 層、テル・サビ・アビヤド I 号丘 11 層が類例としてあげられ、そして近年報告されたテル・サビ・アビヤド II 号丘 1 層(Verhoeven and Akkermans (eds.) 2000)もこの時期に含まれる⁷⁾。土器アセンブリッジは明褐色でスサを混和した土器が多く、粗製と精製の区別は明瞭でない。テル・サビ・アビヤド I 号丘の報告では、この土器を一括して標準土器(Standard Ware)と呼んでいる。装飾は大多数が無文であるものの、テル・アスワドでは粘土帶の貼付による突帯(図 3-1, 2)が、テル・ダミシュリヤでは刺突文(図 3-9, 10)が、テル・サビ・アビ

ヤドI号丘では彩文および貼付文がごく少数みられる。把手のつく例は4遺跡とも非常に目立つ(図3-3~8)。把手や粘土帯の貼付だけがみられることなどから、テル・アスワドとテル・サビ・アビヤドII号丘は他の2遺跡よりやや古いとの想定もされている(cf. Akkermans 1993: 113-119; Le Mièvre and Nieuwenhuyse 1996: 141, 144; Verhoeven and Akkermans (eds.) 2000: 2)。

続くパリフII B期は存在が想定されているだけで、いまだ確実な資料が得られていない。存在が実証されている次の時期はパリフII C期で、テル・サビ・アビヤドI号丘10~7層を示準とする。土器アセンブリッジには新たに暗色磨研土器⁸⁾、灰黒色土器(Gray-Black Ware)、礫混和粗製土器(Mineral Coarse Ware)が加わるもの、II A期以来の標準土器が大半を占める。特に、11~9層では90%以上を占め、8~7層でも80%以上になる(Le Mièvre and Nieuwenhuyse 1996: Table 3. 4.)。また、ハスキング・トレイがこの時期に現われる。土器装飾は標準土器、暗色磨研土器、灰黒色土器に限って施される。このうち標準土器には彩文(図3-13~19)、貼付文、刻文(図3-21)、押捺文(図3-20)がみられ、暗色磨研土器には彩文、刻文、押捺文、暗文が、灰黒色土器には刻文と押捺文がそれぞれ使われている。層位別に変遷をみると、9層まで彩文、貼付文、刻文がわずかにみられる程度であるが、8層以降は押捺文や暗文が加わり、全体的に装飾をもつものが増加する。

次のパリフIII A期は土器アセンブリッジに大きな変化が生じる。II C期と同様の土器(「先ハラフ」土器)に加え、「新しい」土器(new wares)が出現する。「新しい」土器は標準精製土器(Standard Fine Ware; 図3-22, 23, 27, 28, 30)、オレンジ精製土器(Orange Fine Ware; 図3-24)、精製彩文土器(Fine Painted Ware)からなり、いずれもほとんどにサマッラ土器に類した彩文が施され、まれに刻文も組み合わされる。「先ハラフ」土器の装飾は、基本的にII C期と大きくは変わらない。ただし、標準土器に1点のみ暗文が認められ、暗色磨研土器には押捺文がみられず、代わりに貼付文が散見される。灰黒色土器の装飾には彩文、刻文(図3-29)、押捺文(図3-25)、暗文が使われるが、灰黒色土器は個体数自体がII C期、III A期とも僅少であることから、変化として捉えるのは難しい。また、「先ハラフ」土器全体の時期的变化として、貼付文が4層で消滅するいっぽう、彩文は割合を増やすことが知られている。

パリフIII B期はハラフ前期に相当する。土器アセンブリッジもハラフ精製土器(Halaf Fine Ware; 図3-33~36)が大半を占め、そのほとんどには彩文が施される。ハラフ土器以外には、スサ混和粗製土器(Vegetal Coarse Ware)、赤色スリップ磨研土器(Red-Slipped Burnished

Ware)が加わり、他にIII A期以来のオレンジ精製土器、灰黒色土器やII C期以来の暗色磨研土器、礫混和粗製土器がわずかにみられる。しかし、装飾はスサ混和粗製土器に彩文や刻文がまれに施されるのみである。

以上、北メソポタミア地域の一例としてパリフ川流域における新石器時代の土器装飾の変遷をみてきた。こちらでは、パリフII A期において装飾はほとんど見られないものの、II C期で貼付文、押捺文、彩文、刻文から暗文にいたるまで多種の装飾が出現し、III A期以降は彩文が圧倒的割合を占める、といった大まかな流れが見受けられる。

放射性炭素年代からみた併行関係

これまで、北レヴァントおよび北メソポタミア地域における土器装飾の変遷についてそれぞれの例をあげてきただが、両者の時期的な併行関係はどのようにになっているのであろうか。ここでは両地域で得られている放射性炭素年代測定値を参考にしながら⁹⁾、その関係を措定してみたい。

エル・ルージュ2a期については、テル・エル・ケルク2号丘5層で 8960 ± 365 B.P.という値が得られている(Iwasaki et al. 1995: 150)。これに対して、パリフ川流域の土器新石器時代で最古の年代を示すのはテル・アスワドVII層の 8450 ± 120 B.P.という値であり(Akkermans 1993: Table 4.1.)、テル・アレイ2号丘の11~6層で得られたエル・ルージュ2b期後葉の年代(岩崎・西野編 1992: 111)とそれほど変わらない。土器にほとんど装飾がみられないという点でエル・ルージュ2a期とパリフII A期は似通っているものの、放射性炭素年代測定値は前者が先行することを示唆し、しかも、土器装飾がかなり普及していたエル・ルージュ2b期の方がパリフII A期と部分的に併行することを表している。パリフII A期にかんしてはテル・アスワドの他に、それよりやや遅れると考えられるテル・ダミシュリヤ5~7層で紀元前6千年紀前葉の値が得られている(Akkermans 1993: Table 4. 1.)。エル・ルージュ2c期前葉に位置づけられるテル・アイン・エル・ケルク中央区下層でも、紀元前6千年紀前葉の値が得られており(Tsuneki et al. 2000: 28)、両者は部分的に併行関係にあるのだろう¹⁰⁾。パリフ川流域のテル・アスワドで得られている土器に粘土帯を貼付して突帯を形成している例は、エル・ルージュ2b期から2c期にみられる装飾と類似しており、両者の併行関係を補強する事実として注目に値する。

パリフII C期では紀元前6千年紀末の年代が得られているが、これはIII A期、III B期の測定値とほとんど変わらない(Akkermans 1993: Table 4.1.)。エル・ルージュ2c期中葉で紀元前6千年紀半ばぐらいの年代が得られているが(Tsuneki et al. 2000: 28)、サマッラ土器の存在が確認されているので、この時期は少なくとも部分的にパリフIII

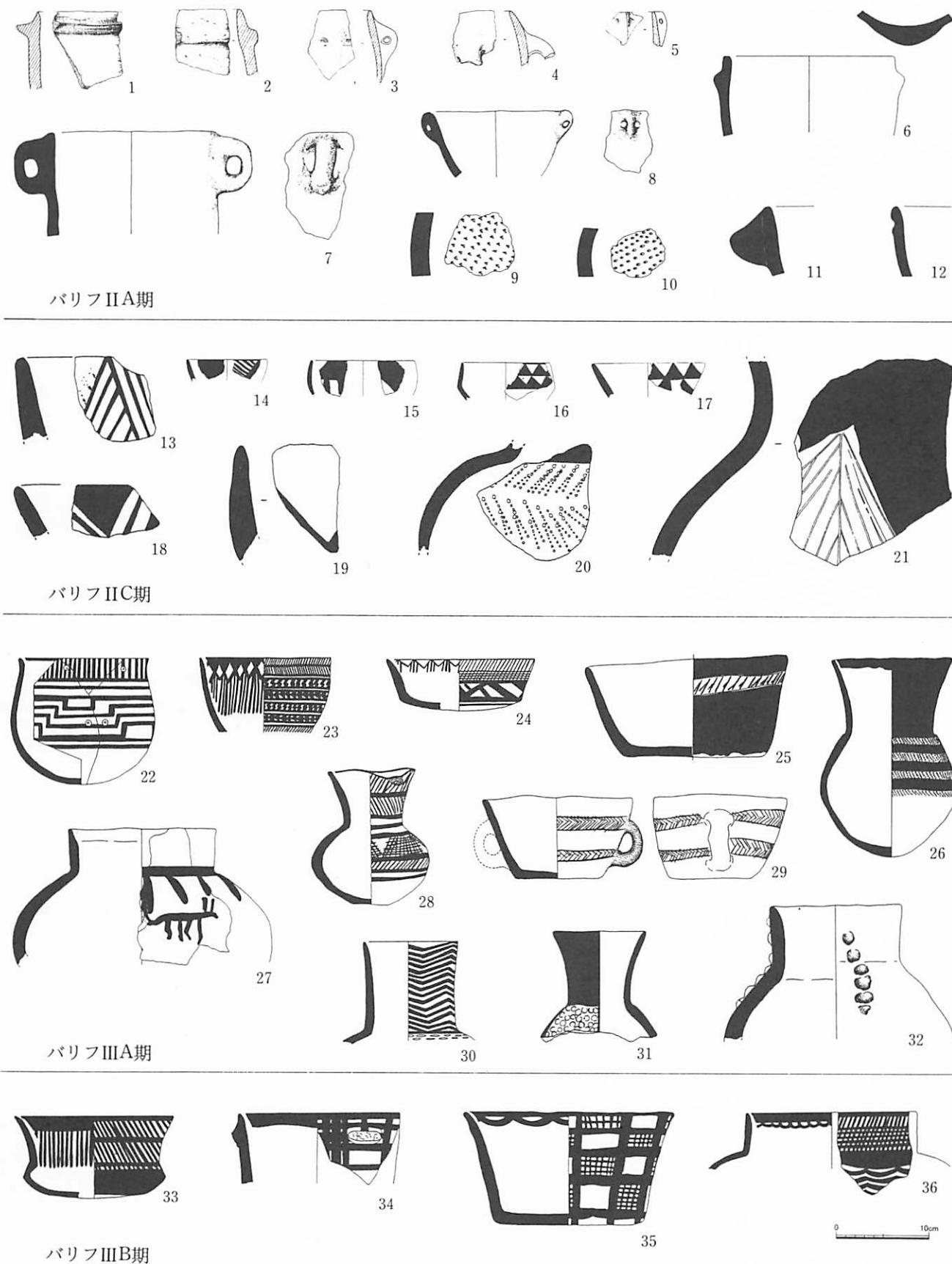


図3 パリフIIA～IIIB期の土器 (Cauvin 1972; van Loon ed. 1988; Le Mièvre and Nieuwenhuyse 1996)
1～7 テル・アスワド 5～11テル・ダミシュリヤ 12～35 テル・サビ・アピヤドI

A期と併行しているに違いない。しかし、放射性炭素年代測定値やハスキング・トレイの出現などの点を考慮すると、パリフII C期にも併行していた可能性が高い。つまり、エル・ルージュ2c期前葉の下限はパリフII C期以前ということになり、これは放射性炭素年代からみても妥当であろう。

エル・ルージュ2c期後葉は放射性炭素年代測定がなされていない。しかし、エル・ルージュ2d期とパリフIII B期はそれぞれハラフ前期の土器を伴うことから併行関係が確実といえる。したがって、エル・ルージュ2c期後葉はパリフIII A期からIII B期の間ということになるが、今のところハラフ土器の出土例がないので、パリフIII A期併行と考えておいた方が無難であろう。

まとめると、エル・ルージュ2a期はパリフII A期より古く、エル・ルージュ2b期は後葉がおそらくパリフII A期前葉と併行関係にある。エル・ルージュ2c期の前葉はパリフII A期後葉からパリフII C期、エル・ルージュ2c期中葉はパリフII C期からパリフIII A期、エル・ルージュ2c期後葉はパリフIII A期、さらにエル・ルージュ2d期はパリフIII B期にそれぞれ相当することになる（図4）。

考 察

放射性炭素年代からみた併行関係を一瞥すると、パリフ川流域に比べてルージュ盆地の先進性が際立っている。土器製作技術の共通性からいえば、装飾がほとんどなく粗製土器もまれなエル・ルージュ2a期は、同じくほぼ無文で精粗の分化が未熟なパリフII A期と比較すべきである。しかし、それぞれの主体になっているケルク土器と標準土器では混和材や色調などの諸属性が大きく異なっており、両者を単純に比較することはできない（cf. 小高 2002a: 117）。今のところは、放射性炭素年代測定値に基づいた位置づけを行なった方が無難であろう。エル・ルージュ2b期では押捺や貼付による装飾が目立ち、精製土器と粗製土器の区分も明瞭であるのにもかかわらず、パリフII A期と部分的に併行関係にあるという事実も同様に考えられる。ただし、粘土帯の貼付による突帶が両者でみられることは前に述べた。いずれにせよ、土器装飾の開始は北レヴァントの方が早く、それは土器生産の開始時期に差があることと関連するようだ。

エル・ルージュ2c期前葉の状況もあまり変わらず、パリフ川流域の土器と対比できるような土器の属性はあまり観察できない。しかし、2c期中葉になると様子が変化する。この時期と併行関係にあるのはパリフII C期からIII A期であるが、そのうちパリフII C期は貼付文、刺突文、押捺文、彩文、刻文、暗文などさまざまな装飾が普及し、ハスキング・トレイが出現し、また精製と粗製の区分が明確になり土器の種別が増加する時期である。いっぽうで、エル・

ルージュ2c期中葉では暗文¹¹⁾とハスキング・トレイの出現がみられる。特に、ハスキング・トレイという特異な土器の出土は、併行関係を探るうえで重要な情報をもたらす。これは、エル・ルージュ2c期中葉およびパリフIII A期におけるサマッラ土器に類する彩文土器、そしてエル・ルージュ2d期およびパリフIII B期におけるハラフ前期土器に引き継がれ、両地域の相互交流が活発になったことを示している。つまり、パリフII C期を土器からみた地域交流の出発点としてみることができよう。この時期にパリフ川流域において土器装飾技法が多様化し、土器の種別が増えるという現象は、エル・ルージュ盆地のような周辺に所在する土器製作技術の先進地との交流が活性化した影響とみることはできないだろうか。

ところで、ル・ミエール（M. Le Mièrē）らは近東における土器の出現において三つの段階を想定している（Le Mièrē and Picon 1998）¹²⁾。その第三段階にあたるのが土器技術の普及の段階であり、紀元前6千年紀初頭に位置づけている。また、この発展段階にあたる土器の基本的特徴の一つとして多様性をあげており、先行段階における土器の簡素さと单调さが技術の未熟さによるものであれば、この多様化は土器の拡散によるものであると述べている（Le Mièrē and Picon 1998: 15）。この意見はまさにパリフII C期の土器において予想できる状況と合致する。年代にかんしては、パリフ川流域で得られた放射性炭素年代とはやや離れているが、土器の様相からみて併行するであろうエル・ルージュ2c期前葉で得られた年代とは一致する。

また、エル・ルージュ2a期から2b期、およびパリフII A期はル・ミエールらのいう第二段階に位置づけられる。今回の検討によれば、この第二段階の開始時期は地域によって異なることが示唆される。そして、エル・ルージュ2b期における土器装飾の普及や土器の種別の増加を考慮すれば、エル・ルージュ盆地では土器が多様化に向けて変わり始めていた様子が窺える。つまり、土器の拡散、交流によって多様化したのではなく、独自に多様化したのだろう。このことが、パリフ川流域と違って土器装飾のヴァリエーションが徐々に増していく現象として捉えられるのだ。

時期が下り、サマッラ土器やハラフ土器に類する彩文土器が出現すると、ほぼ同時に両地域でその出土が知られるようになる。ただし、土器アセンブリッジに占める割合は、ルージュ盆地ではわずかであるのに対し、パリフ川流域では主体となっている。土器製作技術の見地からみれば、最初に現われたサマッラ土器はいずれの地域でも外来のものであったと考えられる。したがって、進展が遅かった地域により大きな影響を与えたとみることもできよう。しかし、サマッラ土器が中部メソポタミアもしくはより南方に故地が想定されていることを鑑みれば、地域的に距離が近く、

図4 ルージュ盆地およびパリフ川流域の相対編年試案と放射性炭素年代

しかも河川によって結ばれているバリフ川流域が影響を受けるのは、当然の結果と受け取れる。

それでも、ルージュ盆地がハラフ併行期に至っても暗色磨研土器を主体とした土器アセンブリッジを変えなかつたことは、注目に値する。ル・ミエールらはテル・サビ・アビヤドIの6~4層でいくつかの多様性が減退した結果、3層以降は土器アセンブリッジの大多数がハラフ精製土器を中心とする精製の彩文土器に占められる例をあげ、明確な型式の出現と次の段階を特徴づける規格化の始まりを看取している(Le Mièvre and Picon 1998: 16)。つまり、バリフ川流域ではサマッラ土器やハラフ土器の影響を受けて、次段階への胎動が始まったといえよう。ただし、ル・ミエールの述べている明確な型式とは、固有の胎土、器形や製作技術、装飾の文様などを伴う一群の土器のことである。この場合、ルージュ盆地ではすでにエル・ルージュ2b期から暗色磨研土器という明確な型式が存在し、しかも土器アセンブリッジの大半を占めていたことがいえる。したがって、サマッラ土器やハラフ土器の出現以前に規格化は進んでおり、これらの精製彩文土器に席巻されることがなかつたのではなかろうか。

しかし、ハラフ土器の影響は、暗色磨研土器の器種や器形に色濃く表れているのも事実である(cf. 三宅 1997: 47~49)。装飾が立体的ではなく平面的になり、特にエル・ルージュ2d期で暗文が盛行する現象も、サマッラ土器やハラフ土器の彩文装飾の影響がないとは限らない。なぜ彩文ではなく暗文を採用するのか、という問い合わせに対しては、暗色磨研土器の暗い色調がアприオリに彩文には適さない、というル・ミエールらの主張が参考になる(Le Mièvre and Nieuwenhuyse 1996: 137~138)。いずれにせよ、サマッラ土器やハラフ土器といった精製の彩文土器がもつ、それ以前にはみられないような卓越した影響力を看過すべきではなかろう。

おわりに

以上、ルージュ盆地とバリフ川流域の土器の変遷を、特に装飾に注目して考えてみた。結果として、土器の初現については前者が早く、土器製作技術の先進性がみられること、そして、ル・ミエールらのいう第三段階への移行はほぼ同時であるものの、ルージュ盆地では独自に起き、バリフ川流域では土器の拡散や交流を通じて起きたであろうことなどが想定された。しかし、本稿で行なった検討は対象範囲があまりにも狭く、筆者自身も目を転じた時に見出すであろう多くの矛盾を危惧している。紙幅の都合もあり踏み込むことができなかつたが、簡単に装飾について考えてみても、その文様にかんする分析といったような、より細部にいたる議論が必要に違ひない。

他にも大きな問題は山積している。たとえば、エル・ルージュ編年がアムーク編年に代わる北レヴァント地域の新たな標準的な編年として機能するためには、まずは北レヴァント地域内の各シーカエンスとの対比を熟慮し、アムークB期やエル・ルージュ2d期にかんする問題、あるいはクリーム土器の出現時期の違いなどといった問題を解消していかねばならない(cf. 三宅 1997)。実際にエル・ルージュ編年の細部は、筆者らが現在進めているテル・AIN・エル・ケルク出土資料の更なる分析によって、十分に検討していくつもりである。また、ルージュ盆地とバリフ川の間の地域、すなわちユーフラテス川中・上流域やクウェイク川流域では、近年調査が活発であるのにもかかわらず、今のところ十分に報告が整っているとは言い難い。特にユーフラテス川上流域では、かなり古手であろうと思われる土器が次々とみつかっている(e.g. Faura and Le Mièvre 1999; Arimura et al. 2000)。これらの資料の整理・分析が進んでくれば、今回行なったような作業において大きな意味を持ってくるだろう。

最後に、北レヴァント地域の新石器時代に取り組む契機と多くのご指導、ご助言をいただいた、常木晃先生、三宅裕先生をはじめ筑波大学シリア考古学調査団の方々に深く感謝申し上げたい。また、安倍雅史氏、下釜和也氏には文献収集等でご助力いただいた。なお、本稿は早稲田大学2002年度特定課題研究助成費(課題番号2002A-821)の助成による研究成果を含む。

註

- 1) 本稿で示した年代はすべて未校正の放射性炭素年代に基づく。
- 2) ル・ミエールらは北レヴァント地域以外のもっとも原初的な土器が出土する遺跡に、チャタルホユックとイランのテペ・グーラン(Tepe Guran)をあげているが(Le Mièvre and Picon 1998: 11~12)、後者の遺跡規模はせいぜい1 ha前後であり(Meldgaard et al. 1963)、周辺にも当時の大規模集落はみつかっていない。また、先土器新石器時代B期の巨大集落は、AIN・ガザル('Ain Ghazal)、ペイサムン(Beisamoun)、バスター(Basta)など南レヴァント地域で目立つが、この地域では土器の普及がやや遅れ、しかもその頃はすでに集落規模の縮小が著しい。
- 3) テル・アレイ2号丘11~5層にかんしてはエル・ルージュ2c期とする意見もあるようだが(常木晃氏私信)、本稿ではとりあえず既刊文献(常木 1993; Iwasaki et al. 1995; 三宅 1997)の記述にのっとった。詳細については本報告の刊行を待ちたい。
- 4) このような突帯は北メソポタミアにもみられるが、視覚的効果をねらった装飾とみなすにはやや疑問が残る。土器を持ちあげるのに便利な、把手に類する機能を想定する意見もあるようだ(cf. Le Mièvre and Picon 1998: 13)。ここでは基本的に装飾の一種として扱つたが、あくまで最初に掲げた本稿における「装飾」の定義(視覚的効果を併せもつ器面の加工)を考慮しての判断である。
- 5) テル・AIN・エル・ケルク中央区の層位は現在のところ検討中であり、既刊の概報における記述(Tsuneki et al. 1997, 1998, 1999, 2000)は修正を要することが判明している。ただし、大きく三つの

- 時期に分かれることが想定できるので、本稿では便宜的にそれぞれ上・中・下層と表記する。
- 6) これまで、筆者はテル・AIN・エル・ケルク出土のサマッラ土器に類した精製彩文土器をエル・ルージュ2d期に位置づけていた(e.g. 小高 2002b)。しかし、2002年夏の発掘調査において、エル・ルージュ2c期中葉で初現する事実を層位学的に確認した。
- 7) 他にトゥルル・ブレイラト(Tulul Breilat) I号丘およびII号丘やテル・ムンバテ(Tell Mounbatah)、ギュルジュテペ(Gürcütepe) I号丘などでもバリフII A期段階の土器が得られている(Copeland 1979; Beile-Bohn et al. 1998)。しかし、表面採集資料という性質を考慮して、あるいは本報告が未刊であるため、今は採りあげなかった。また、後述するバリフIII A期の遺跡についても同様である。
- 8) 「暗色磨研土器」という用語の示す範囲は研究者によって様々である。つまり、バリフ川流域でいう暗色磨研土器が、北レヴァント地域の暗色磨研土器と単純に一致する土器であるとは限らない(cf. 三宅 1995)。この点はテル・サビ・アビヤドIの報告でも意識はされていた(Le Mièvre and Nieuwenhuyse 1996: 127)。筆者自身の見解としては、器種や器形などの点から厳密には両者を別の種類の土器として考えたい。
- 9) これまでに両地域で知られている放射性炭素年代はさまざまな機会に得られているため、測定方法(AMS法の採用・不採用など)は統一されていない。したがって、単純に数値を比較することは危険を孕むのかもしれない。しかしながら、新石器時代の土器に関する情報は必ずしも豊富にあるとはいえない。それだけから相対編年を指定するのはより危険であろう。そこで、ここではあえて放射性炭素年代測定値を一つの指標として採りあげた。
- 10) 土器装飾の点で言えば、エル・ルージュ2c期前葉とバリフII A期の土器は両者とも無文が多い。一見、肯定的な補強材料にも思えるが、ようやく装飾が出現してきたバリフ川流域に比べ、ルージュ盆地では先行するエル・ルージュ2b期においてかなりの土器が装飾をもっていたにもかかわらず、2c期で無文化する傾向にある。したがって、共時的な事象としては類似していても、変化の流れを考慮すると両者を同一視するわけにはいかない。
- 11) ただし、バリフII C期の暗文にかんしては詳細な報告がなく、北レヴァント地域で流行する暗文と同一視できるかどうかは不明である。
- 12) ル・ミエールらによる三つの段階については、拙稿(小高 2002a)において紹介し、若干の考察を加えた。ご参照願いたい。

引用文献

- Akkermans, P. M. M. G. 1993 *Villages in the Steppe: Late Neolithic Settlement and Subsistence in the Balikh Valley, Northern Syria*. International Monographs in Prehistory, Archaeological Series 5. Michigan, Ann Arbor.
- Akkermans, P. M. M. G. (ed.) 1989 *Excavations at Tell Sabi Abyad: Prehistoric Investigations in the Balikh Valley, Northern Syria*. BAR International Series 468. Oxford, BAR.
- Akkermans, P. M. M. G. (ed.) 1996 *Tell Sabi Abyad: The Late Neolithic Settlement*. Leiden, Netherlands Historisch-Archaeologisch Instituut te Istanbul.
- Arimura, M., N. Balkan-Atli, F. Borell, W. Cruells, G. Duru, A. Erim-Özdogan, J. Ibanez, O. Maeda, Y. Miyake, M. Molist and M. Özbaşaran 2000 A New Neolithic Settlement in the Urfa Region: Akarçay Tepe, 1999. *Anatolia Antiqua* 8: 227-255.
- Beile-Bohn, M., C. Gerber, M. Morsch and K. Schmidt 1998 Neolithische Forschungen in Obermesopotamien: Gürcütepe und Göbekli Tepe. *Istanbuler Mitteilungen* 48: 5-78.
- Braidwood, R. J. and L. S. Braidwood 1960 *Excavations in the Plain of Antioch I: The Earlier Assemblages Phases A-J*. The University of Chicago Oriental Institute Publications LXI. Chicago, University of Chicago Press.
- Cauvin, J. 1972 Sondage à Tell Assouad (Djezireh, Syrie). *Les Annales archéologiques Arabes Syriennes* 22: 85-103.
- Contenson, H. de 1992 *Préhistoire de Ras Shamra: les sondages stratigraphiques de 1955 à 1976*. Ras Shamra-Ougarit VIII. Paris, Éditions Recherche sur les Civilisations.
- Copeland, L. 1979 Observations on the Prehistory of the Balikh Valley, Syria, during the 7th to 4th Millennia B.C. *Paléorient* 5: 251-275.
- Faura, J.-M. and M. Le Mièvre 1999 La Céramique néolithique du haut Euphrate Syrien. In G. Olmo Lete and J.-L. Montero Fenollós (eds.), *Archaeology of the Upper Syrian Euphrates, the Tishrin Dam Area*, 281-298. Barcelona, Universitat de Barcelona.
- Iwasaki, T., H. Nishino and A. Tsuneki 1995 The Prehistory of the Rouj Basin, Northwest Syria: Preliminary Report. *Anatolica* 21: 143-187.
- Le Mièvre, M. and M. Picon 1998 Les débuts de la céramique au Proche-Orient. *Paléorient* 24/2: 5-26.
- Le Mièvre, M. and O. Nieuwenhuyse 1996 The Prehistoric Pottery. In P. M. M. G. Akkermans (ed.), 119-284.
- van Loon, M. N. (ed.) 1988 *Hammam et-Turkman I: Report on the University of Amsterdam's 1981-84 Excavations in Syria*. Leiden, Netherlands Historisch-Archaeologisch Instituut te Istanbul.
- Lyonnet, B. (ed.) 2000 *Prospection archéologique Haut-Khabur occidental (Syrie du N.E.) volume I*. Bibliothèque archéologique et historique 155. Beyrouth, IFAPO.
- Masuda, S. and S. Sha'ath 1983 Qminas, the Neolithic Site near Tell Deinit, Idlib (Preliminary Report). *Les Annales archéologiques Arabes Syriennes* 33: 199-231.
- Meldgaard, J., P. Mortensen and H. Thrane 1963 Excavations at Tepe Gurjan, Luristan: Preliminary Report of the Danish Archaeological Expedition to Iran 1963. *Acta Archaeologica* 34: 97-133.
- Riis, P. J. and H. Thrane 1974 *Sükas III: The Neolithic Periods*. Publications of the Carlsberg Expedition to Phoenicia 3. Copenhagen.
- Suleiman, A. and O. Nieuwenhuyse (eds.) 2002 *Tell Boueid II: A Late Neolithic Village on the Middle Khabur (Syria)*. Subartu XI. Turnhout, Brepols.
- Tsuneki, A. and Y. Miyake 1996 The Earliest Pottery Sequence of the Levant: New Data from Tell el-Kerkh 2, Northern Syria. *Paléorient* 22/1: 109-123.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, S. Akahane, T. Nakamura, M. Arimura and S. Yano 1997 First Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1997), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 18: 1-40.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, S. Akahane, T. Nakamura, M. Arimura and S. Sekine 1998 Second Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1998), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 19: 1-40.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, M. Hudson, M. Arimura, O. Maeda, T. Odaka and S. Yano 1999 Third Preliminary Report of the

- Excavations at Tell el-Kerkh (1999), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 20: 1–32.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, O. Maeda, T. Odaka, K. Tanno and A. Hasegawa 2000 Fourth Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (2000), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 21: 1–30.
- Verhoeven, M. and P. M. M. G. Akkermans (eds.) 2000 *Tell Sabi Abyad II : The Pre-pottery Neolithic B Settlement*. Leiden, Netherlands Historisch-Archaeologisch Instituut te Istanbul.
- 岩崎卓也・西野元編 1991 『エル・ルージュ盆地における考古学的調査I』筑波大学シリア考古学調査団報告1 筑波大学歴史・人類学系。
- 岩崎卓也・西野元編 1992 『エル・ルージュ盆地における考古学的調査II』筑波大学シリア考古学調査団報告2 筑波大学歴史・人類学系。
- 岩崎卓也・西野元編 1993 『エル・ルージュ盆地における考古学的調査III』筑波大学シリア考古学調査団報告3 筑波大学歴史・人類学系。
- 小高敬寛 2002a 「北レヴァントおよび北メソポタミアにおける土器使用の普及をめぐって」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』47輯4分冊 113–121頁。
- 小高敬寛 2002b 「テル・エル・ケルク遺跡出土の精製彩文土器」『日本西アジア考古学会第7回総会・大会記念講演・研究発表集』9–12頁。
- 常木 晃 1993 「エル・ルージュ盆地の編年試案」岩崎・西野編 1993 63–69頁。
- 常木 晃 1995 「肥大化する集落—西アジア・レヴァントにおける集落の発生と展開ー」古代オリエント博物館編『文明学原論—江上波夫先生米寿記念論集ー』 99–130頁 山川出版社。
- 三宅 裕 1995 「西アジア暗色磨研土器の研究(I)」『筑波大学先史学・考古学研究』6号 59–77頁。
- 三宅 裕 1997 「西アジア暗色磨研土器の研究(II)」『筑波大学先史学・考古学研究』8号 31–60頁。

小高敬寛
早稲田大学文学部
Takahiro ODAKA
Waseda University